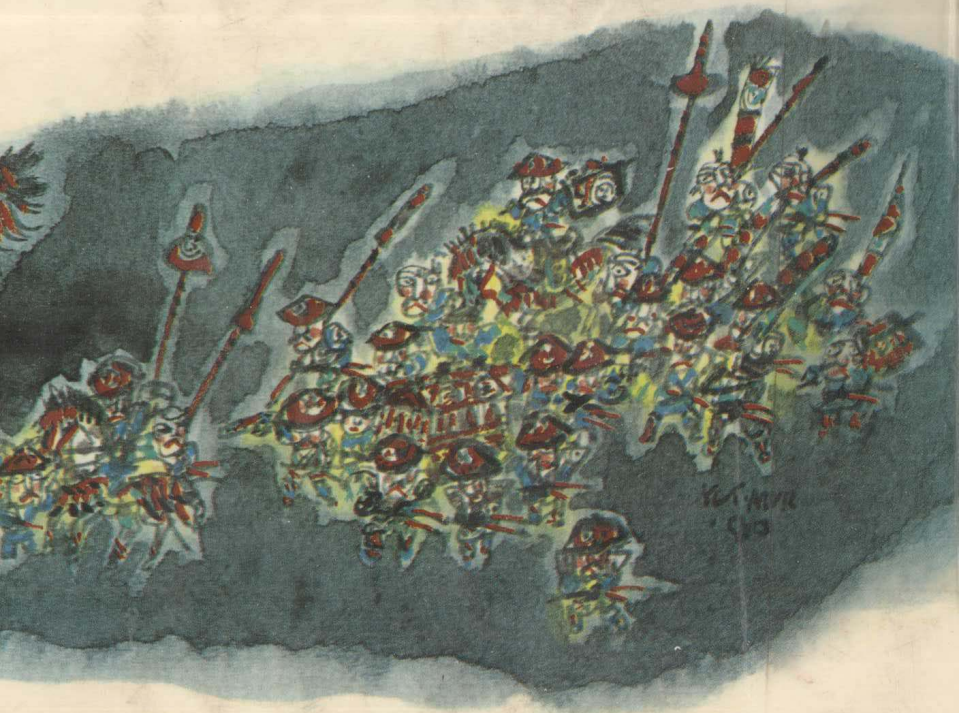


代表作 20 時代小説

日本文藝家協会編



普及版 第二十卷

代表作時代小説 定価一三〇〇円

昭和五十七年十一月十五日 発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷かをり

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京六一二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

ISBN4-8088-3079-5

無検印承認

日本文藝家協会編

代表作時代小説

第二十卷

編纂委員

尾崎秀樹

武蔵野次郎

和田芳恵

村上元三

山岡莊八

東京文藝社

まえがき

山岡 莊八

この選集もよく続いたものだと思う。昭和三十年度以来、この昭和四十九年度版の刊行で、恰度二十冊目になった。

この二十年間に、世界の動向は思想的な推移をふくめて目まぐるしく展開した。

昭和三十年にはまだ日本は前大戦の傷あとが深く、経済面ではようやく戦後の荒廃から立ち直りを見せだした頃であった。それが今では世界矚目の経済大国に生長し、生長したと思ったところで、アラブ圏から原油の輸出に待ったをかけられ、再び第二次大戦勃発當時を想わすような石油不足にのめり込もうとしている。

実際に戦争はしていないのだから、不足の程度は比較にならない筈なのに、もうドラム罐を山林や耕地に運び込むというエゴイズムの出現が、私たちを面喰わせている。

このすばしこいエゴイズムが、仮りに全国の農協にあったとしたら何うなろうか？ 各農協が、ドラム罐など隠匿する代りに、適当な場所を選んで、せめて自分たちで使う二三年分の貯油場でも作ってあったとしたら何うであらうか？

こんな資金は旅の恥は掻き捨ての、武勲赫々たる農協の世界見物費の中に求めれば、ほんの僅かな関心だけで、素晴らしいものが建っていったに違いない。

いや、それが建った話でもよし、建てなくて消えた話でもよい。仮りに作家が、そうしたところに取材の眼をこらした小説をモノしていたら、何処かで必ず建っていたに違いない。それが実は、読者大衆と小説の接点なのである。ところが、この両者の間には、ご存知の編集者なるものが介在し、その好みによって、適宜、自在にエロづけられる。その結果は、あわててドラム罐を隠匿しなければ安心出来ないという行為にもなれば、他人の困難を自分だけは金儲けのタネにしようと北曳笑む素晴らしく間の抜けた賢さにも変化する。私は総じて作家が、大衆文芸と純文芸の区別はないなどと云っているのを聞くと慄然とせざるを得ない。作家としてその才能次第で、書きわけることなど思ひも寄らないという人はあろう。しかし編集者の好みとか、才能というものが介在して発表される限り、書きわけ得る人が書きわけて悪いわけではない。

純文小説の場合には視野を変えよの、テーマが気に入らぬと云ってみても話になるまい。しかし、始めから大衆を意識において書きあげる小説には、それなりの良心と責任感と才能がなければならない。

セックスは石油の代りにならないのである。いや、給料だけはどん／＼上げて、インフレは真平というような経済理論は、まだ地上に芽生えていないこと位は知っていなければならぬのである。

とにかく現在の大衆文芸は玉石混淆、手のつけられない混乱を示している。その間で、曲りなりにも主張を持って二十年、二十冊目を刊行して来た「代表作時代小説」の編集者、発行者の労を多としなければならぬ。そして、ここに集録された作品に欠けているものは何であつたらうかと、改めて反省してみるのも作家の責任であらうと思う。

原
书
缺
页

原
书
缺
页

原
书
缺
页

原
书
缺
页

原 书 缺 页

原
书
缺
页

原
书
缺
页

原
书
缺
页

原
书
缺
页

原
书
缺
页

横切り、その赤い線は、点々と土間に続いている。

舞台の殺し場で使うのよりは色が淡いが、血のりにちがいない。生きた人間の血だ。

胸さわぎが疾風のよう^{はて}に与七をとらえた。一度はためらったが、草履をぬぎ、小部屋の障子を一気にあけると、そこに女が死んでいた。血の海の中に、仰向けになっているのは、お松である。

どうい^うわけか、着物を着ていない。じゅばんだけである。

松の模様をとびとびに置いた白のじゅばんが、真っ赤に染まっている。苦悶した表情が残っていた。

こういう時には、一言も口から出ないものだ^と与七はあとで思った。呆然と、立っているだけである。

何も知らない小染が、そこにはいつて来た。

三

こういう血なまぐさい現場に、芸者が来合わせたのだから、与七でなくても、どう扱^うていいのかわからない。失神しそ^うになっ^ている女を、とにかく戸外に連れ出す。小染の肩を抱きながら、しかし、与七は冷静に周囲を見まわした。

ふしぎに、境内には誰もいなかった。

与七が思ったのは、さっきちらと見かけた男の姿であ

る。

あれは弟分になっ^ている文次だと思^う。

自分をみとめながら、姿を消したのは、やましいことがあるからで、それはこのお松殺しのためだと思^った。

文次とお松のあいだに、かわり合いがあるかどうかは知らないが、お松のことだから、いく人も緩^{ゆる}なしている客の一人に、男前の若いばくち打ちがまじっていた^て、ふしぎはない。

痴話が昂^{きやう}じて、刃傷沙汰になったという話は、芝居にもいくらもあるが、現実にも、しじゅう耳にすることで、与七がまだ堺町の小屋にいた時でも、若い女形が、それこそ姫御前のあられもない形相で、かみそりをふりまわして、あろうことか、芝居茶屋の女中を斬^きったという事件もあった。

文次がお松を殺したのだとすれば、与七にできることは、それを見のがしてやることである。

すくなくとも、お松の死体が発見され、当然その前後に見かけたものはいないかと訊^きかれた時に、文次を見たとい^ってはならないと、心に決めた。

向い側の茶屋に介抱しながら連れてゆき、紙に包んだものを女に渡して小染を休ませたあと、お松の茶屋に戻ったが、突然、与七は、自分がいま大変困^つた立場にすることに気がついた。冗談ではない。文次のことを考え